

くらしを支えた流通

●大戸窯製品の流通

会津若松市にある大戸窯跡群は、東北最大規模の窯業生産地です。8世紀後葉～10世紀中葉には須恵器生産、12世紀後半～14世紀には中世陶器生産が行われ、長期間継続していました。須恵器については陸奥国内に広域流通しており、現在、岩手県奥州市の胆沢城よりさらに北の花巻市貝の淵I遺跡まで分布が確認されています。

矢吹が原と江平遺跡周辺では、開発がピークだった9世紀前半中心に、上雨屋12号窯式～南原19号窯式の製品が上宮崎A・下宮崎A・後原・江平・栗木内遺跡で確認され、そのなかでも当時の最大拠点集落だった江平遺跡が目立ちます。

●塩の流通

8世紀後半～10世紀の浜通り海岸部では、郡衙のもとで活発な製塩が行われました。筒形土器と呼ばれる製塩土器の分布をみると、北陸との交流のもと、低地開発が展開する会津地方を含め、現在の福島県に相当する範囲中心に供給されました。対象は官衙だけでなく、集落まで普遍的に及んだのが分かります。

矢吹が原と江平遺跡周辺では、開発が本格化する8世紀後半に後原・栗木内遺跡で筒形土器の分布がみられたあと、開発が停滞・終息へ向かう9世紀後半～10世紀中葉にむしろ目立つようになりました。製塩土器は、白山C・白山E・江平・栗木内・堂平B・堂平F・辰巳城遺跡などで出土しています。

8世紀の開発奨励策の影響により、国家の所有物であった土地は次第に私有が認められ、全国各地で開発が始まります。古墳時代から政権側と安定した関係を結んだ陸奥南部の現在の福島県に相当する範囲では、その影響が明らかで、その中でも矢吹が原は台地開発の典型的な地域モデルと評価することができます。

本展示及び解説資料作成に際し、ご協力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

(順不同、敬称略)

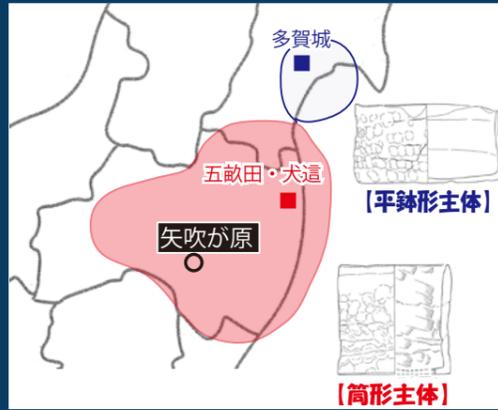
山口耕一、笹生衛、高橋透、村田淳、大橋信弥、吉野武、矢吹町教育委員会



見て・触れて・考え・学ぶ 体験型フィールドミュージアム



大戸窯製品の分布範囲



製塩土器の分布

令和4年度ふくしま歴史探訪展 古代ふくしまの開発

一矢吹が原を中心に

開催期間／2023年1月21日(土)
～3月21日(火)

編集・発行／(公財)福島県文化振興財団
福島県文化財センター白河館
〒961-0835
福島県白河市白坂一里段 86
TEL: 0248-21-0700
FAX: 0248-21-1075

令和4年度ふくしま歴史探訪展

古代ふくしまの開発

一矢吹が原を中心に

白河地方北部に広がる矢吹が原は、ほぼ平坦な台地ながら、周囲を流れる河川の河床が低く、水の確保が難しい土地でした。昭和時代の国営開墾事業によって水利が整備され、現在の水田風景が完成しました。

遡ること千年以上前の奈良・平安時代にも矢吹が原には開発の波が及んでいた時期がありました。それは、百万町歩開墾計画(722年)、三世一身法(723年)、墾田永年私財法(743年)などの開発奨励策の影響と考えられます。それにより、ほぼ無人だった台地上に多くの集落が出現し、谷あいでは水田耕作が行われました。

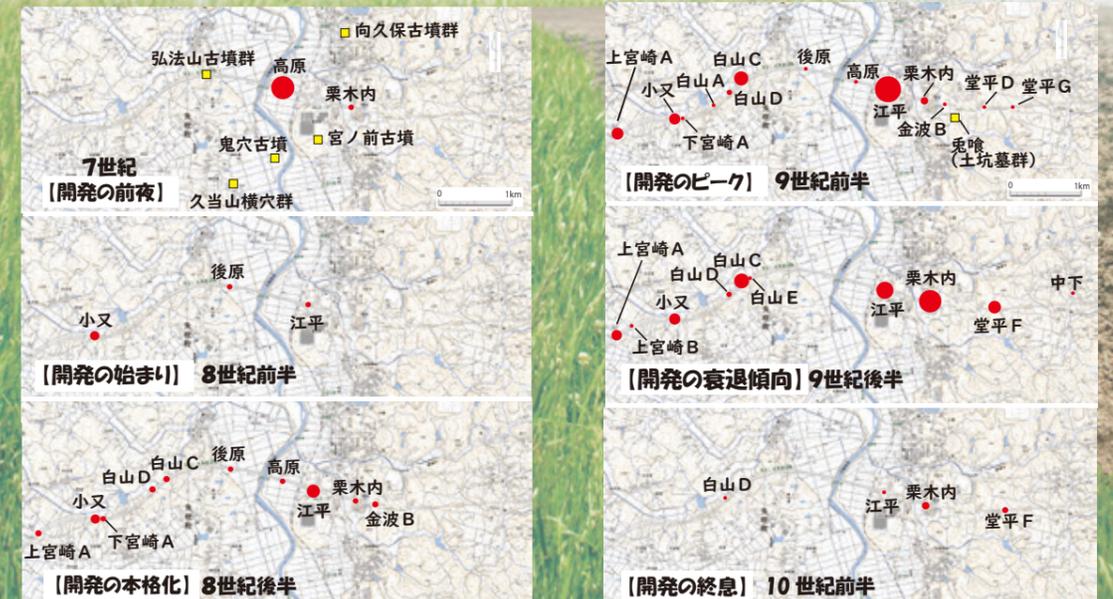
この企画展では遺跡の発掘調査で明らかになった古代の矢吹が原の姿の一端を、県内の関連資料とともに紹介します。



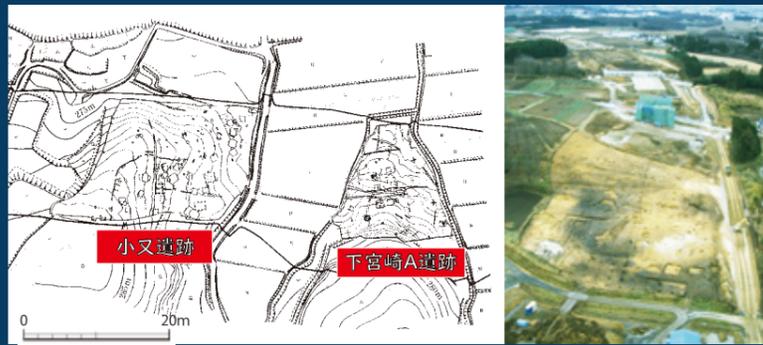
昭和11年の開墾の様子 (矢吹町教育委員会提供)

台地開発の展開

矢吹が原の開発によって、8世紀前半から9世紀前半にかけて台地上の遺跡数は増加し続けますが、9世紀後半から減少傾向に転じ、10世紀前半には著しく少なくなって、中頃には一部の小規模遺跡を除き廃絶してしまいました。これは所管の白河郡衙機能の消長、ひいては律令国家体制の動向と連動しています。集落は、樹枝状に発達した谷沿いの丘陵上に集村形態で営まれ、谷あいに造成された「谷地田」とセットを構成しました。



遺跡分布の変化



小又遺跡と下宮崎 A 遺跡の位置関係

小又遺跡全景



谷地田

丘陵上の集落域

谷地田の検出状況
8世紀後半～10世紀中頃

有力層の台頭

小又遺跡でみられる官衙風建物群は、末端官衙機能を兼ね備えた集落内の有力層の居宅です。正面奥と両側に複数棟の倉庫を含む掘立柱建物群、手前に大型竪穴住居を伴う特徴がみられます。関東で7世紀末～8世紀初頭に定形化したものが、陸奥南部へ8世紀後半に伝播し、9世紀前半になると定着しました。

陸奥南部の代表的な官衙風建物群が発見された遺跡として郡山市の正直C遺跡があげられます。集落変遷は、矢吹が原の台地開発と連動した小又遺跡のケースとよく似ています。出現時期は8世紀前半に求められ、その後、8世紀後半に官衙風建物群が出現します。しかし、9世紀後半になると消滅してしまい、小規模な竪穴住居だけの構成になりました。

●官衙風建物群のある集落

矢吹町上宮崎に所在する小又遺跡では、矢吹が原の開発が本格化する時期に官衙風建物群と呼ばれる規格的配置の建物群が形成され、有力層の台頭を示しています。谷を挟んで互いに向かい合う位置にある下宮崎A遺跡は、漆を扱う工房を備えた派生集落として営まれました。

●谷地田の営まれた集落

矢吹町白山に所在する白山D遺跡は、谷沿いの丘陵上に立地し、谷を挟んで向かい合う位置関係に白山C遺跡がみられます。この遺跡では、集落と谷地田がセットで発見されました。谷地田の耕作は、両側の集落の出現時期から矢吹ヶ原の開発が本格化した8世紀後半に開始されたとみられ、10世紀中頃まで存続したようです。確認されたのは7面で、わずかに隆起した畦畔によって区画され、湧水を水田に供給するための水利施設も発見されました。



官衙風建物群

外周溝を巡らせた竪穴住居

井戸

長方形竪穴

正直C遺跡V地点遠景



【8世紀前半】

【8世紀後半】

【9世紀前半】

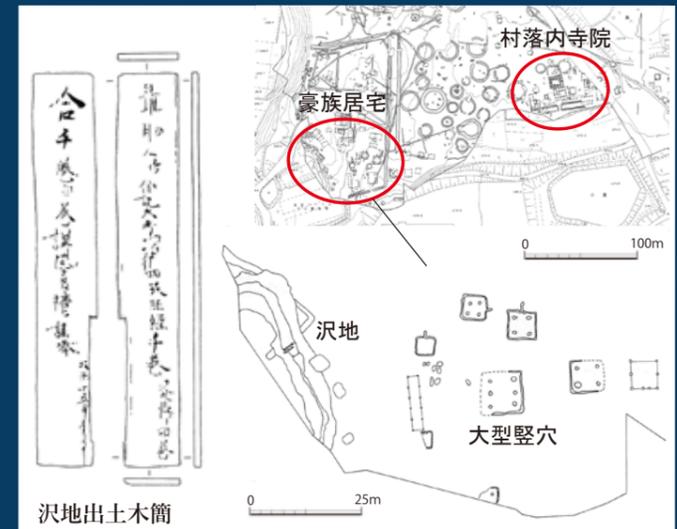
【9世紀後半】

正直 C 遺跡の集落変遷

仏教信仰の普及

矢吹が原から阿武隈川を挟んだ対岸に位置する、玉川村の江平遺跡は、白河郡内に営まれた拠点集落です。この遺跡の豪族居宅内では、国分寺建立詔(741年)から2年後の天平15(743)年に、菅原麻呂という人物によって金光明経の読経法会が執行されたのが、出土木簡から判明しています。

また、江平遺跡では、9世紀前半に定型的な伽藍配置をモデルにした、村落内寺院が営まれました。2時期の変遷がみられ、A期は、東に金堂、西に塔を見立てた建物配置から白河郡衙付属寺院の借宿廃寺、B期は、南から北へ回廊が取りつく中門・金堂・講堂を見立てた建物配置から陸奥国分寺をモデルにしたと推定できます。この江平遺跡での寺院建立と軌を一にして9世紀前半の白河郡内では、仏堂のみで構成される典型的な村落内寺院の建立の動きがみられました。この時期は矢吹が原と江平遺跡周辺の開発のピークにあたり、民間への仏教信仰の普及と連動したことがうかがえます。



豪族居宅

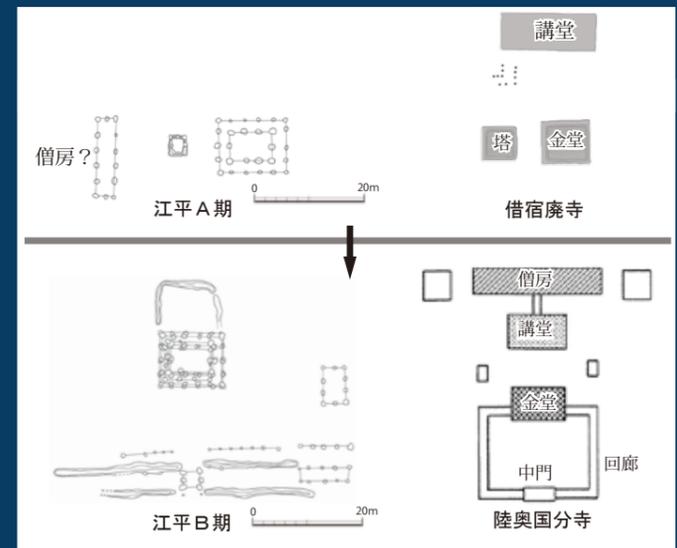
村落内寺院

沢地

大型竪穴

沢地出土木簡

江平遺跡 木簡と豪族居宅



江平 A 期

借宿廃寺

江平 B 期

陸奥国分寺

江平遺跡 寺院跡の変遷

墓制の変化

矢吹が原や江平遺跡周辺の開発がピークに達した9世紀前半は、墓制に変化が起きました。江平遺跡と連続する丘陵上の兎喰遺跡では、集落域から独立して営まれた土坑墓24基が発見されています。それらは伸展状態の遺体を埋葬したもので、隅丸長方形～楕円形の画一的な平面形を呈しており、油煙が付着し、墨書されたものを含む土師器杯、須恵器長頸瓶、刀子がともに出土しました。8世紀までの横穴墓に代わる新たな集団墓と評価されます。



副葬品の土師器杯

土坑墓(兎喰遺跡) I 区 3 坑: 9 世紀前半



副葬品の土師器杯

土坑墓(兎喰遺跡) II 区 4 坑: 9 世紀前半